

松江藩の儒学者たち—宇佐美瀧水と桃白鹿—

宇野田 尚哉

はじめに

- ・宇佐美瀧水 (1710-1776) と桃白鹿 (1722-1801) という二人の松江藩儒に注目。
cf. 「藩儒」：藩に儒者として召し抱えられた武士身分の学者 ⇨ 町儒者・村儒者
- ・ただし、人物伝風の物語としてではなく、松江市史の研究成果の紹介として。
- ・今日のお話のポイント
(1) 幕府・諸藩における儒者登用の動向のなかでの松江藩の事例の位置
(2) 松江藩の事例に即して見た藩儒という存在 (身分上の特質や藩内での役割など)

1. 幕府・諸藩における儒者登用の動向

- ・〈中世＝仏教の時代／近世＝儒教の時代〉
→この通念は、どこまで妥当か？
- ・幕藩体制にとっての重要性：仏教＞儒教
→ただし、学問の一般的基礎をなしたのは儒学 (とくに朱子学)
- ・徳川家康による朱子学者林羅山 (1583-1657) の召し出し、林家の形成
…慶長 12 年 (1607) 年召し出し。ただし僧侶の資格で。寛永 6 年 (1629), 民部卿法印。
…林家の当主が僧形を改め大学頭に任ぜられたのは、元禄 4 年 (1691) のこと。
- ・幕府の教学政策
…5 代將軍綱吉や 8 代將軍吉宗の時代 (いわゆる元禄・享保期：1688-1736) に儒教への関心が高まるが、一時的な現象に終わる。
…幕府が朱子学による幕臣の教化に取り組み始めるのは、寛政 2 年 (1790) の寛政異学の禁 (=幕府が林大学頭に対してその塾の学問を朱子学に統一するよう指示) 以後。
- ・諸藩の動向
…幕府の動向に対応して、近世初期や元禄・享保期に儒者を登用する動向が見られるが、一時的な現象に終わる傾向。
…諸藩において儒者を登用し藩校を設けるという動向が顕著になるのは、18 世紀後半の藩政改革の時代 (いわゆる宝暦・天明期：1751-1789) 以降。

2. 松江藩における藩儒登用の動向と〈藩儒の家〉の形成

- ・松江藩の動向：基本的には諸藩の動向と一致
- ・寛永 18 年 (1641), 林羅山門人黒沢石斎 (1622-1678) 召し抱え (当初 200 俵, のち 1000 石)。しかし、儒者ではなく一般藩士に。
- ・享保 19 年 (1734), 長沢東海 (1697-1745) 召し抱え (10 人扶持)。ただし、一代限り。

- ・画期をなすのは、18 世紀半ばにおける、宇佐美瀧水と桃白鹿の登用。
…寛延元年 (1748), 宇佐美瀧水召し抱え (当初 10 人扶持, のち 100 石)。
…宝暦 7 年 (1757), 桃白鹿召し抱え (新知 70 石学校料米 20 俵銀 10 枚, のち 120 石)。
⇒宇佐美家・桃家は、学問を家業とし代々当主が儒者となる家として、以後存続。
=〈藩儒の家〉の形成。のちに成立する園山家の場合も含めて、100 石程度を給せられるのが〈藩儒の家〉の標準的待遇。
- ・宇佐美瀧水：上総国夷隅郡長者に上層農民の子として生まれる。11 歳のとき利倉寿仙という在村学者に入門, 17 歳のとき江戸に出て荻生徂徠に入門。その後故郷に戻って私塾を営んだが、再び江戸に出て私塾を営み、松江藩儒萩野復堂の推薦により松江藩に召し抱えられる。江戸遊学→村儒者→町儒者→松江藩儒。農民身分から武士身分へ。当時「めったに名は高けれども、元の出が一農夫などの誹謗もあ」ったという (『先哲像伝』)。
→瀧水は、嫡子が病弱で「家業相統難相成」ため、藩に願い出て、「上総国百姓宇佐美甚八二男金之丞」を養子にしている (『列士録』)。
- ・桃白鹿：石見国安濃郡の医者坂根幸悦の子として生まれる。14 歳のとき江戸に遊学。その後有力町人の養子となり, 22 歳のとき林家に入門。そこで頭角をあらわし, 入門 14 年後に松江藩に召し抱えられる。医者の子→江戸遊学→有力町人の養子→松江藩儒 (武士身分)。
- ・藩儒＝学問を職掌とする特殊技能者。最も重視されたのは、特殊技能としての学力。学力さえあれば、農民身分・町人身分の者も藩儒として登用され, 武士身分を与えられた。〈藩儒の家〉の継承に際しても、学力の有無が重視され, 学力の高い後継者を確保するためであれば格式違い・身分違いの養子も許された。
↑すくなくとも 18 世紀半ばの時点では、松江藩は、藩儒として登用しようとしている学者の学派は考慮していなかった (瀧水は朱子学を激しく批判した徂徠学派, 白鹿は朱子学者林羅山に始まる林家の塾の出身)。寛政異学の禁以降の松江藩の対応については要検討。

3. 松江藩における藩儒の役割

- ・桃白鹿の養嗣子桃西河 (1748-1810) の随筆『坐臥記』：「我は家業人にて執戟の者に非ず。……吾は家業ある故に、撃剣の術を学ぶまじき法なれば、撃剣には長ぜず。……家業の拙からんことを恐れて、家業人は他の芸術を学ぶまじき国禁あり」。
→「家業」の中身とは？
- ・藩儒の公務：藩主の侍講, 世子・庶子の教育, 上級藩士の学問相手, 一般藩士およびその子弟の教育, 系譜編纂・年譜編纂などのさまざまな文事。
↑公務とは別に、私的に門人を教育したり, 各地の学者と交流したり, 文人的営みを楽しんだり…。
- ・松江藩の特徴：宇佐美瀧水は江戸詰, 桃白鹿は国許詰という役割分担がはっきりしていた点。以下では、桃白鹿の松江での活動の一端を彼の日記によりながら紹介する。

- ・宝暦7年(1757)における桃白鹿の登用：学校料米20俵を給せられていることからわかるように、国許で藩校(文明館、のち天明4年〔1784〕に明教館と改称)を運営し一般藩士およびその子弟の教育を行うことが彼の主要な公務。
 - …宝暦8年(1758)6月5日、松江城下に屋敷を与えられる。
 - …同年6月20日、敷地内に設けられた藩校文明館で講釈を開始。
 - …安永7年(1778)12月27日、「文明館改造成就、聖堂新成」。
 - …安永8年以降、家老以下の上級藩士による年頭の聖像拝礼が定例化。また、この年以降、白鹿の日記に、文明館(明教館)で一年間に行われた講釈・会読の回数と出席した藩士の人数が定型的な記述の仕方では記録されるようになる。それによれば、桃白鹿をはじめとする儒臣たちにより、講釈は3～4日に1回、会読は4～5日に1回くらいの割合で開かれていたことがわかる。
 - …天明元年(1781)5月25日、藩主の帰国(5月18日)を待って、聖像拝礼。「総計百十三人」が出席。
- ⇒文久3年(1863)年、文武の教場を一か所に集めるかたちで文武館を創設。この時点まで、文明館(明教館)は、次第に公的性格を強めながらも、桃家の私塾としての性格を持ち続けた。
- ・藩主の侍講
 - …明和7年(1770)以降、月に3回中御居間で行うというパターンが確立。
- ・上級藩士の学問相手
 - …日記での初出は安永5年(1776)年11月28日条の「御当職方御添役中御用人中御誘引文明館御出被成、孟子万章下篇交際何心也ト云所ヨリ講説ス」。
 - このような学習活動と藩政改革との関係は？

おわりに—今後の課題—

- ・松江の特徴：次のような史料が残っている点
 - …宇佐美濃水が上級藩士と交わした書簡など
 - …桃家歴代の日記をはじめとする「桃家資料」
 - …徂徠学を奉じた好学藩士松原基が編集した叢書『消暑漫筆』全150巻+α
- ・これらの史料を用いて明らかにされるべき点
 - …松江藩校の歴史
 - …藩儒を中心としてなされた学習活動(会読など)と藩政改革との関係
- ・現時点での成果の一例：『松江市史』史料編5近世I所収の小田切尚足『報国』
 - …第6代松江藩主松平宗衍の「直捌」のもとで延享期の藩政改革を主導した家老小田切尚足の著作。宇佐美濃水の評言を含んでいる点を特徴とし、濃水は小田切尚足が主導した改革政策を激しく批判している。

参考文献

- 石川謙『日本学校史の研究』小学館、1960年。
- 佐野正巳『松江藩学芸史の研究』明治書院、1981年。
- 宇野田尚哉「儒者」、横田冬彦編『身分的周縁と近世社会5 知識と学問をになう人びと』、吉川弘文館、2007年。
- 「市史編集コラム 第11回 松江藩士松原基と『消暑漫筆』」、2011年8月1日、
<http://www1.city.matsue.shimane.jp/k-b-k/bunkazai/shishi/colum/colum11-1.html>
- 「島根県立図書館所蔵「桃家資料」—解題と目録—」、『松江市史研究』第3号、2012年3月。
- 梶谷光弘『松江市ふるさと文庫11 松江藩校の変遷と役割』、松江市教育委員会、2010年。